

日照りに想う昆陽様

この原稿を書いている時点で今年の夏を振り返れば猛暑と少雨に尽きると思います。佐倉市内の私の所では七夕の頃を過ぎてから高温続きで、この月は最後まで雨が降りませんでした。8月1日は空が暗くなり雷鳴も聞こえましたが、雨量としては1ミリ未満だったようです。四街道市の知人は40ミリのまとまった雨で畑も一息ついたと言っているのに、当方は空振りでした。その後も8月6日に短時間の夕立、台風7号が近畿に上陸したお盆休みにややまとまった雨があっただけです。このような日照り続きにも拘わらず、水田では稲の生育が順調で一面に黄金色の絨毯が広がっていて、稲刈りも始まっていますから、このまま災害が無ければ豊作間違いなしの様です。これは完備された灌漑施設の恩恵によるもので、以前なら干害で凶作になった事でしょう。国内が凶作でも輸入でしのげると思うのは現代人の驕りで、歴史上では悲惨な飢饉が繰り返されています。



当方の乾燥した畑で元気なのはサツマイモ、オクラ、落花生などの熱帯原産の種類です。主食の稲が凶作の際にそれを補完するのが救荒作物でサツマイモもその一種ですが、関東で栽培が成功したのは江戸時代で、稲に比べれば新顔と言えるでしょう。その導入に功績のあったのが青木昆陽で、千葉市幕張には神とて祀った昆陽神社があります。

たかが新種作物の栽培指導で神とは大げさな事と思うでしょうが、サツマイモの栽培方法は特殊ですから、将軍が農民に種芋を配布してこれを栽培しろと命令しても、ほぼ失敗に終わるでしょう。

種を蒔けばよいと言うような一般的な方法は通用しません。サツマイモの場合は温床に伏せた種芋から出る芽を切り取って苗にする訳ですが、苗と言っても根の無い状態ですから、苗を植えるのではなく挿し木というべきものです。

挿すのは高畝で水はやりませんから、一時的に萎れてそのまま枯れてしまうかと心配になります。我慢していれば発根して蔓が伸びます。どんな農業熟練者でもこれらの手順を指導者無しで考え出せるは思えません。

サツマイモのお陰で飢饉を乗り越えた人々が青木昆陽を神と祀る気持ちは分かります。幕張を含む北総台地は水田に向かず、稲に代わる作物として重要だった事も考えられます。上の写真の手前が昆陽神社、奥が火を祀る秋葉神社の祠です。現在の昆陽神社は京成幕張駅脇の踏切をアンダーパス化する工事に伴い、2004年に建て直されたものだそうです。



祠を囲む木立が無くむき出しですから殺風景の感は否めませんが、あの開かずの踏切が無くなって恒常的な交通渋滞がなくなったのは大助かりです。

下の写真のような開花は稀ですが、猛暑の今年は期待が持てます。

佐倉市 坂本文雄

山形月山行記・徒然のままに

1 憧れの月山

月山は、山形市の北西、山形県のほぼ中央に位置する標高 1,984mの山で、湯殿山(標高 1,504m)、羽黒山(同 414m)とともに出羽三山のひとつに数えられています。また出羽三山は、磐梯朝日国立公園の最北部を形成しています。

『月山花賛歌』(崙(ろん)書房)によれば、およそ 35 万年前に活動を開始した火山とのこと、また、貴重で豊富な動植物が見られることから、月山全体が国指定天然記念物となっているとのことです。高山植物の詳細については、この度は割愛することにします。

豊富な(むしろ多過ぎる)雪のため、冬の(ゲレンデ)スキーは困難と言われ、夏スキーのメッカとして知られてきました。筆者も若い頃から憧れ、一度は訪れたいと思ってきました。

この度は、今月 8 月上旬に日本を襲った台風 6 号の進路を窺いつつ、比較的影響が少ないと思われ、かつ限られた日数で登れそうな山域として、長年憧れてきた月山を選びました。



(右上写真：ウメバチソウ、ミヤマリンドウ、ミヤマウスユキソウ)

2 月山の自然、疑似高山帯と日本海側森林植生



植生の垂直分布を語るには、通常その地域の南北関係を考慮します。そのような中で森林限界は、北アルプスでは標高 2,400m 前後、東北地方では標高 1,600m などと言われます。

ところが、この度の登山口、姥沢(標高 1,200m 付近)では、歩き始めは樹高 20mほどと思われるブナ林、それから 30 分ほど歩いた辺り、標高 1,300m 付近でしょうか、いつの間にか矮性林となり、間もなく高山帯のように高木の見られない植生に変わ

っていき、ニッコウキスゲなどが見られるようになりました。つまり、通常亜高山帯に見られる針葉樹林帯が全く欠落しているのです。早々と視界が開けることは、登山者にとっては嬉しい限りです。



このように、本来亜高山帯の針葉樹林が分布するところが、高山帯のような景観となっている状態を『疑似高山帯』と呼ぶそうです。月山の場合、冬の日本海から吹き寄せる強風と豪雪がその原因のようです。月山の日本海側の斜面では、急勾配と強風のため、樹木が育たず地肌がむき出しとなっている痛々しい光景が目立ちます。

一方、月山の南東方向、太平洋側に位置する蔵王山(標高約 1,800m)では、冬の風雪の影響の違いで針葉樹林が欠落することはなく、スノーモンスターの独特の景観が有名となっています。また、ハヤチネウスユキソウで有名な岩手県の早池峰山(標高 1,913m)では、雪の影響は少ないものの、南斜面では蛇紋岩の影響で森林限界の低標高化が見られ、北斜面では山頂近くまで針葉樹林が分布しています。

ところで、私たちが暮らす太平洋側の森林植生と日本海側の森林植生を対比させる話題として、クロモジとオオバクロモジのような、地域的亜種の話があります。この度も姥沢付近やそれ以下の標高でオオバクロモジが終始確認できました。また沢筋では、北陸から北海道南部に分布するエゾアジサイの花が目を楽ませてくれました。対比の事例ではありませんが、クロツル(ニシキギ科、本州日本海側)やヤハズハンノキ(カバノキ科、主に福井県以東月山まで)に久々にお目にかかれたのも、それぞれ小さな喜びでした。



3 月山のツルニンジン、茂原のツルニンジン



登山口の姥沢では、ツルニンジンが多く見られました。幸い既に開花している個体もあって、その様子を見た瞬間「ひょっとしてこれは、近縁種で希少種のバアソブではないか!？」との思いに駆られ、その後大きな期待（妄想）へと膨らんでいきました。その根拠は、花期が早めなこと、筆者の地元茂原で見たものよりも花の大きさが一回り小振りで色も淡いし、葉の様子も心持ち毛深くて質が薄いような・・・などと感じたこと（思い込み）からでした。

帰宅後、複数のサイトで月山山行記やバアソブに関する記事を調べたところ、なんと、その期待は、儚くも敢え無く消え去っていったのでした。

環境省 RD2021 の都道府県指定状況を見ますと、バアソブは、千葉県を含む多くの自治体ではそれぞれ然るべき指定になっていますが、山形県は白塗りです。また『原色日本植物図鑑』（保育社、絶版）では、ツルニンジンは温帯暖帯、バアソブは温帯とあります。となると、やはりアレは、温帯に分布し山形県は白塗りのバアソブだったのではないかと、未だに未練がましい思いに囚われています。

ところで、東京都公園協会 HP に「バアソブの種には翼がなく、ツルニンジンには翼があります・・・（中略）・・・バアソブは翼がないため、分布域を効果的に拡大できず絶滅危惧種となって・・・」とありました。『千葉県植物誌』で両者の県内における分布を見ますと、その見解を如実に示しているようです。となると、バアソブは何故そのような戦略を選択・進化したのか？それとも、進化したのがツルニンジンなのでしょうか？ ナゾです（各図鑑では前者が後、後者が先の記載となっています）。

4 月山神社に参詣して思ったこと

月山山頂には山頂小屋があり、その先に月山神社があり、本当(?)の山頂はその先で、標識もなくナンとも淋しい姿でした。

せっかくここまでやって来たのだからと、神社の入り口で祓料を納め、祈禱していただき、お礼をいただいて参詣しました。

同様に山頂に神社本宮を構えて神主が駐在している例として、北アルプス立山連峰の雄山神社などがあります。同じ山岳信仰の山でも、富士山や丹沢の大山、奥多摩の御岳山などでは、山麓に多くの宿坊が並んでいて、そこに先導師や御師と呼ばれる人たちが駐在するなど、古くからの異なった仕組みがあるようです。山岳信仰の対象とされている山は国内には数多あって、それぞれ山頂に大なり小なり祠（社?）を構えています。

自然信仰や山岳信仰、神社について「日本では古来から・・・」などと、筆者も人前で分ったような顔して度々話してきました。同時に、雄大荘厳な山や古木の姿に憧れや畏敬の念を抱くことも度々です。

一方で、「ナンだかヘンじゃない?」と違和感を禁じ得ない機会に、度々遭遇してきました。この度の月山で目にした山岳信仰の現在進行形の姿、体験の一つとしては受け止められても、我がこととしては直接は関係ないのが正直な思いです。翻って地域の神社、古老たちも意味が分かっていないのに、慣例だけ踏襲しようとする現実。街では、地域起こしの名のもとに大騒ぎするイベント神輿。経験則だけでは如何ともし難い最近の気象災害の激甚化。相変わらず自然を軽視した開発。幼い頃の故郷の自然とともにあった暮らしと台風被害や懐かしい祭りの記憶。日本人独特の自然への畏敬の念と恵みへの感謝の念。それらが混在し、同時に限りなく乖離しているのが現実、現代社会、との思いが止みません。

そんな中で今自分にできること、Think Globally Act Locally、さて、何から行動しましょうか。

5 最後に老婆心ながら・・・

月山周辺には、南側に位置する山形県立自然博物館ネイチャーセンターと、北側に位置する磐梯朝日国立公園月山ビジターセンターとがあって紛らわしいので、お出かけの際にはお気を付けください。

（記：茂原市 望月力智）



チョウを巡る旅②「群馬県赤城」：アサギマダラ

<出会い、淡い色に魅せられて>

アサギマダラと出会ったのは、秋の奥日光でした。私は、秋の味覚である「ヤマブドウ」と「コクワ（サルナシ）」を収穫に行きました。目の前にヤマブドウを見つけ「美味しそう！」と手を伸ばした時に、ふわふわ／ゆらゆらと一頭の蝶が現れました。その蝶が「アサギマダラ」だったのです。秋の柔らかい陽射しに照らされた淡い色が、とても清楚で一瞬で虜になりました。



観察地から榛名山を望む

<旅する蝶に会うために旅をする>

アサギマダラは、日本列島を旅（移動）することで知られています。夏になると高地へ移動し、秋になると南下するのです。マーキング調査によって、移動距離1000km以上、所要時間は、17日から1ヶ月ということが明らかになっています。



マーキングされた個体
翅に JAP と記されています。

ふわふわ／ゆらゆらと飛ぶ蝶が、日本列島を移動するというダイナミックな行動をとるなんて信じられませんでした。是非、移動しているところをこの目で確かめたいと思いました。蝶の後ろについて一緒に南下したいのですが、私には翅が無いので実現は困難です。さらに1か月以上も家を留守にすることもできません。そこで、南下する蝶の集結地として知られている群馬県の赤城を訪れることにしたのです。

<アサギマダラの楽園>

季節は、9月中旬から下旬、フジバカマの群落に数え切れないほどのアサギマダラが集まっていました。アサギマダラを撮影しようカメラを構えますが、全く人を恐れることなく例によってふわふわ／ゆらゆらと花から花へ移ります。ファインダーを通して見る全ての個体に旅の無事を祈りました。

<オスとメスの見分け方>



オス：黒斑がある

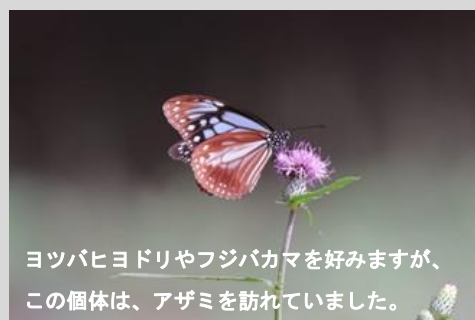
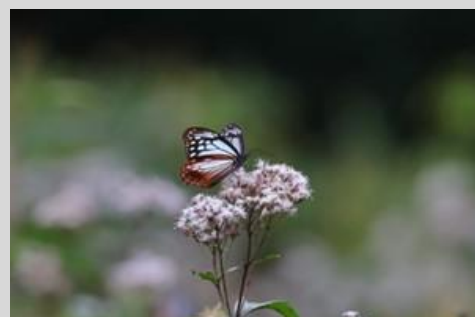
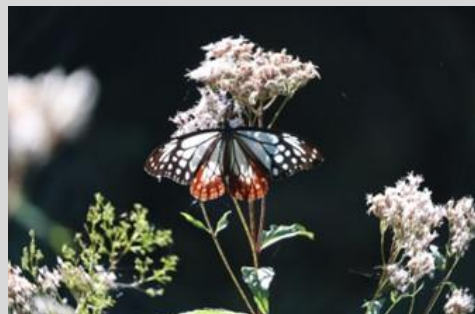


メス：黒斑がない

西野 孝法（千葉市）

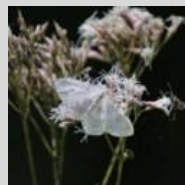
<アサギマダラ>

緑がかった淡い青（アサギ）がとても清楚です

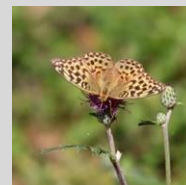


ヨツバヒヨドリやフジバカマを好みますが、この個体は、アザミを訪れていました。

フジバカマを吸蜜する蛾 アザミとヒヨウモンチョウ



翅が透けています



川の中に川がある ふれあえる松戸川

江戸川は、松戸駅から歩いて10分程度で堤防にのぼることができます。駅に近い一級河川の江戸川が滔々と流れています。堤防からスカイツリーが見えます。サクラの季節にはカラシナが咲き堤防が黄色に染まり、桜のピンク色と相俟って見事な風景が描かれます。今年4月の東葛観察会で運河の堤防を歩いた時、ナノハナが咲き誇っていました。指導員から明かされたのはナノハナによって堤防の土壌が弱体化する点でした。同じように江戸川でもカラシナによる堤防の弱体化が江戸川事務所のページに掲載されていました。ナノハナもカラシナも根が大根化し、それを狙ってモグラが土中を駆け巡り、堤防をスカスカにしてしまうというのです。指導員から大根化した根を見せてもらいました。かけらをなめて見たら、とてもおいしいとは言えない代物だったそうです。

堤防を降りると「ふれあい松戸川」が流れています。「川の中に川を作った」この事実にびっくりです。命名も市民募集したと聞いています。この河川は江戸川とともに流れ、水の浄化、坂川が浄化されるのに役立っています。

何のためかと思っ、ネット検索し、ホームページを探し当てました。それによると「平常時に坂川流域から江戸川へ流入する汚濁負荷を古ヶ崎浄化施設でとらえ、江戸川河川敷から旧坂川に流し、柳原水門から江戸川へ放流するもので、金町、栗山、ちば野菊の里の3つの浄水場をバイパスさせることで利水障害の回避に役立っている」とあります。

流水保全水路（ふれあい松戸川）は、首都圏（東京、埼玉、千葉）の水道水源となっている江戸川の水を安全で良好な水質にするため、汚れのひどい坂川河川水を下流へバイパスする水路で、次のように続いています。「①都市用水の取水が安全にできるようにする。②有害な物質が江戸川に流出しないよう未然に防ぐ。③動植物の豊かな生息空間の創出—江戸川の水質改善を図り、生態系の保全創出を行う。」この3つの役割を担っています。

ふれあい松戸川の完成直後は河岸には草一本生えていませんでしたが、5年10年と経つうちにオニグルミをはじめ多様な植物が生え、林のようになりました。

江戸川・坂川をきれいにする工夫は、これ以外にも江戸川・坂川に加え、手賀沼の水質浄化のために利根川から北千葉導水路を通して江戸川に流れ込んでいます。北千葉導水路のパンフレットには、流域の1200万人の水を賄っているとありました。

東葛観察会で昨年6月に行われた「手賀沼でお散歩しぜん観察会」で北柏駅から手賀沼自然ふれあい緑道にアクセスし、緑道にある常夜灯、藤姫伝説をもとにした石碑、第二機場を見学したのは記憶に新しいところです。第二機場近くに導水路として埋設されている直径3.2メートルの土管が展示してありました。それを見た瞬間「あっ！同じものを見たことがある」と思いました。北千葉導水路の出口は東武アーバンライン豊四季駅近くの野々下親水公園です。そちらにも同じ土管が展示されています。利根川から取水された水は大堀川に流れていました。パンフレットや写真では見たことがありますが、入り口と出口の土管が、頭の中でつながり、少しうれしい気分になりました。

水の供給にとつてもない巨大な装置や施設で支えられているのを知ると心洗われる不思議な気持ちになるのでした。



ふれあい松戸川（2012年9月）



茂みの中にあるふれあい松戸川

（松戸市 藤田 隆）